編集後記

誰に頼まれたわけでもない。それなのにこういうものを作らずにいられなかったのは、自分が四年過ごしているこうも心地良い研究室の存在を、多くの駒場生にも知ってもらいたかったからに他ならない。仏文は宣伝が苦手だ。照れ屋で控え目な人士が多いし、そもそもが実用性を懐疑してかかる学問なので、自らの魅力や進学のメリットをうまく語れない。そこで人よりもいくらか厚かましく生まれ落ちた身として、進んでちんどん屋の役割を買って出たのである。多くの人に助けられた。野崎先生は原稿を真っ先に書いて下さり、五人の卒業生は仕事に忙しい中、こちらの依頼に快く応じてくださった。学部生たちもまた、アンケート調査を中心に熱のこもったメッセージを寄せてくれた。みんな仏文が大好きで、日ごろは口にしなくてもこの学科の良さがよくよくわかっているのだった。怠け者の宿命で、結局締め切り直前に大慌てで作業に追われる羽目になった。時間が足りなくて、準備を進めていたのに掲載を取りやめざるをえなくなった企画もある。あらゆる面で、もう三日あれば、と嘆息を抑えきれないのだが、もう三日あったらやっぱり怠けてしまうのかもしれない。仏文は昔、東大の中の人気学科のひとつだった。文学青年の憧れだったのである。そんな時代は遠いものとなり、平成生まれの進学者にとっては、かえって自由に研究しやすくなっていると思う。妙なプライドや余計な先入観と無縁に、自分の好みのままに研究を進められるのだ。文学はそのとき、今までとは一味違う新たな魅力を開示して読む者を楽しませてくれることだろう。本郷で一番居心地が良いに違いないこの研究室で、今はまだ駒場にいる皆さんが、やがて切り開いてくれる仏文の新しい歴史は、いったいどんなものになるのだろうか。研究室でお会いする日を、心から楽しみにしている。（修士二年坂爪彬）

□□□